

## 同僚性の構築を大切にしながら 村全体で、学力向上を図っていく

沖縄本島の北端に位置する国頭村では、村内全小中学校（1中、7小）をあげて、昨年度から本格的に「学びの共同体」の実践に取り組んでいる。まだ、発展途上とはいえず、すでに小学校では学力の向上傾向が見られ、中学校では問題行動が減少したという。

### 目先の学力から同僚性の構築へ

同村の小橋川春武教育長はこう話す。

「私は平成20年に本村教育長に就任しましたが、宮城尚志指導主事が異動してきた翌21年に、タイムテーブルを作成した上で、学力向上に取り組んできました。その結果、すぐに県平均に到達したのですが、同時に「極化の問題も生じていました。」

そんな時、23年度に国頭中学校の神元勉校長から『学びの共同体』で、底上げを図りたいという話を聞き、勉強してみたところ、学力や行動面の改善もそうですが、特

に教師の同僚性という部分に感銘を受けました。私自身、実際に現場に同僚性が希薄化してきたため、いざという時に先生方がともに行動できない現実に危機感を持つていたからです。

そこで、23年12月の校長会で、私から『来年度は全村で取り組みたい』と話をしました。そして、24年1月に、村内の全校長とともに先進校の静岡県の田子浦中学校と丘小学校へ研修に行ったのです」

続けて宮城指導主事はこう話す。

「中学校では、23年度に神元校長が話したら、先生方がすぐに取り組み始め、小学校でも、一部先行実施が始まりました。それを受け、翌24年度から、全村で導入し、国頭学びの会『ゆい』を立ち上げました。」

そうした実践を通し、次第に聴き合うということを大事にした授業が増えています。もちろん、ベテランになればなるほど、



写真左から、小橋川春武教育長、宮城尚志指導主事。

授業づくりの考え方を転換することは難しいものです。しかし、何の教科でも、一度、学び合い、聴き合いが成立するとこの実践にはまってしまいます。実際に、昨年度1年で私は59回、授業公開を見にきてほしいと学校に招かれました。非公式の授業公開招待を入れると70回以上です」

そうした実践を重ねていくことで、徐々に教師の姿も変わってきたと宮城指導主事は話す。

「学びの側から見た授業改善の視点が徐々に持てるようになり、最近、先生方が既存の指導方法にこだわらなくなってきました。例えば、問題文の記されていない課題



教師の異動がなかった学年では、穏やかに聴き合う関係が築かれている。

文を配り、教師に問われる前に『何を求めればいいのか？』と、子どもたちが集中して、考え始めるような工夫をした授業も出てくるようになりました。

また、中学校でひとつになるということ、小学校でも同様の取り組みをする必要があったわけですが、当初は7校中5校ある僻地で、果たしてこの実践はできるのかという疑問の声もありました。しかし、奥間小学校で研修を実施し、同じ僻地の

教師が集まって交流し、学び合う中で、僻地校こそ、この方法がより効果を発揮するのではないかとこの声も出てきました」

### 辺土名小学校の実践状況

取材日、僻地校ではない辺土名小学校(仲松辰也校長・児童数152名)でも、学び合いの授業が行われていた。

4年生の国語では、コの字型教室で、子どもたちが読み取ったことをノートにまとめていたが、場面に応じて、「そこは、どう書いているの?」「ここはどう?」と聴き合っている姿が見られた。

こうした実践の様子について、昨年度から在任している、鳥袋和徳教頭はこう話す。「今春の異動で、半数ほどの教師が代わってしまい、今年はやっくりでもいいから、また一歩ずつ踏み出していいこうという状況です。本校は、昨年度、学力調査結果が大きく上がってきましたが、その理由は、学び合う授業の質というよりも、学びの共同体でいうような同僚性にあつたと思えます。沖縄独特の『ゆいまーる(助け合い)精神』が同僚性を築いているのだと思います。例えば、放課後での学習支援をやる場

### 資料 全国学力調査結果結果 (小学校)

	国語A	国語B	算数A	算数B
国頭村	75.1	58.9	72.7	58.5
全国	81.7	55.8	73.5	59.2
沖縄県	77.0	51.7	66.5	52.9

国語Bは全国平均も上回る結果が示されたほか、算数A、Bともにはほぼ全国平均に並んだ。



写真右から、仲松辰也校長、鳥袋和徳教頭。

合も、担任だけがやるのではなく、校長、教頭もやる。そういう意味での同僚性です。

正直、まだ授業の質につながる同僚性には高まっていないかもしれないかもしれませんが、ひとりひとりの子どもを大事にし、何か課題があっても全員で支えていける雰囲気があります。ですから、この同僚性の上について授業の質を高めたいと思います」

今年度、赴任した仲松校長はこう話す。

「今は、まだ関連書籍を読んでいる段階ですが、理念はすごいと思います。私の中に授業の具体像はまだありませんが、教師が投げかけ、子どものつぶやきを拾って広げていく。それを実際にやってみて、子どもの変容が見えたら、私同様、異動したばかりの教師も変わっていくだろうと思います。そういう授業を展開できる中で、子どもの学力を向上できればいいですね」

### 国頭中学校の実践状況

国頭中学校（神元勉校長・生徒数150名）でも、この日、あらゆる教科で学び合を入れた授業が行われていた。

3年生の学級では、社会科で資料を読み取りながら学び合う学習が行われていた。

教室内には、少し姿勢を崩し、斜に構えた（風な）姿を見せる生徒もいた。しかし、一見そう見える子どもが、資料を読み取り、学び合っていく過程で、率先して資料文を読んで聞かせていたりする姿が見られたのが非常に面白かった。

授業後、神元校長はこう話す。

「私は国頭教育事務所で指導班長をしていた時に、学びの共同体を知って、これが本物だと思ったのです。そこで、23年度、本校に赴任した時、すぐにランドデザインを示して、『こういう学校にしたい』『慌てなくてもいいので、できることからやってほしい』と伝えたところ、6月には教室がコの字型になっていました。佐藤学先生ではありませんが、『騙されたと思ってやってみて』といったら、すぐに複数の教員がやってみてくれたのです。

もちろん、その前提としては、プレゼンを行って理念を示したり、コの字型だとういことや、小グループだとどんないいことがあるかを説明はしていききました。また、導入初年度である23年度の校内研修会では、授業を見る視点についても話をしてきました」

そして、まずホワイトボードを真ん中に置いて、話し合う学習活動を導入したという。それは、声の大きな子に話し合いを支配される危険があり、学び合いの本質でないことはわかってきた。しかし、一斉授業から脱却するきっかけとして、ホワイトボードを真ん中に置いて、4人の考えをまとめる取り組みを入れたのだという。そして、みんなで学習し、わかり合うことが楽しいと気付くと、子どもたちはすぐに、前向きに学習に取り組むようになっていった。

「現在は、一部の生徒の考えが書かれた発用のボードから、4名の考えが書かれたシンキングボードに変えていこうとしています。繰り返し、校内の先生方で授業を見合い、子どもの学びを見とりながら、授業を学びの共同体のスタイルに修正していくところですよ」と神元校長。

ちなみに現在、月1回ペースで、学年研修を実施。1時間目は1年生、2時間目は2年生、3時間目は3年生と時間を変え、他学年の授業も研修に行けるようにしているという。また、先進校のDVDを研修の資料にもしているが、百聞は一見に如かずということ、昨年度、11名の教師と3名の



授業中、学び合うことが楽しいと感じていることが表情から容易に読み取れる。

生徒を九州等の先進校へ派遣したという。

こうした取り組みが教師も生徒も変えつつあると神元校長は話す。

「教師は研究協議以外でも子どもものの学びについて、固有名詞を出して熱く話し合うため、『生徒よりも先生の方が、学び合っているね』と事務職員がいったほどです。

また何か問題があっても、教師が保護者を学校に呼ぶのではなく、自分から出向いて、子どもと保護者とともに考える、まるごと引き受ける姿勢もできています」

「私が21年度に異動してきた頃は授業で寝ている生徒もいましたし、授業中に生徒指導の先生が廊下を見回っていました。児童相談所等関係機関への相談もありました。しかし、今は問題行動はまったくありません。2〜3名ほどあった不登校も今はゼロです」と宮城指導主事も話す。

しかし、本質的な課題があると神元校長。「まだまだ学びの質が深まっていません。数学は数学、社会は社会といった教科の本質に根ざした学びが不十分です。そういうことを認識した上で、ジャンプの課題をどうつくるかなども今後の課題です。

そして、こうした授業改善の結果に学力

向上があると考えています」

最後に、小橋川教育長はこう話す。

「本村は、当初は学力向上のために『学びの共同体』に取り組み始めました。しかし、今は学力は気にしていません。教師に同僚性が築かれ、校長の理念も通るようになる。教師は互いの授業を支え合って、より良くしていく。そうやって授業の質を高め続けていけるならば、結果的に学力はついてくるものだ。そう信じています。

そして、さらにこの実践研究を深め、将来、『学びの共同体について勉強したいので、国頭村に異動希望を出す』というような先生が増えてくれるようになれば、本村共同体も活性化すると考えています」



「学びの共同体」導入を最初に提案した、神元勉校長。